

会場：小田原卸センター内会議室
日時：2016年10月4日 12:30～13:30

❖ 会長挨拶



辻村 彰秀 会長

皆さん、こんにちは！ 10月になりました。今日は冷房を入れるほど暑く、なかなか秋らしい陽気になりません。その上、台風18号が来るようですので十分ご注意ください。

今日は、米山月間ですので、少しロータリー米山記念奨学会についてお話いたします。皆様はご存じだとは思いますが、米山記念奨学会は、日本独自のもので、勉学、研究を志して日本に在留している外国人留学生に対し、日本全国のロータリアンの寄付金を財源として、奨学金を支給し支援する民間の奨学団体で、将来、母国と日本との懸け橋となって国際社会で活躍する優秀な留学生を奨学することを目的としています。現在年間約720名の奨学生を採用しており、これまでに支援してきた奨学生は昨年7月までで18,648名となり、その出身国も123の国、地域になります。奨学団体としては、事業規模、採用数とも、日本国内では民間最大です。通常の奨学金による経済的な支援だけではなく、ロータリー独自の世話クラブ、カウンセラー制度によって、親身な心のこもった支援がされています。このような素晴らしい奨学会ですので、その原資となる皆様のご寄付を来週11日、25日の例会時に米山記念奨学委員会が入り口にて受け付けますので宜しくお願いいたします。できれば1万円以上のご寄付をお願い申し上げます。又、来週の卓話は米山奨学事業の意義を認識、確認していただくために、米山学友の温君寧（ウェン ジュンニン）君の卓話です。宜しくお願いいたします。

今日15日は大磯プリンスホテル、16日は秦野市文化会館にて2780地区の地区大会が開催されます。16日にはロータリー財団100周年記念の講演が本会議前の午前中に開催されます。県西地区で久しぶりに開催されます。是非皆さま、近くの秦野市で開催されるので、多くの方の参加を再度、お願いいたします。

本日の卓話は、湘南ベルマーレフットサルクラブ所属の久光重貴さまの「がんと闘い夢を届ける」です。宜しくお願いいたします。最後になりますが、皆様に大変さみしいご報告がございませぬ。会員の鈴木竜哉 さんが本社への転勤のため、今月退会されます。大変楽しく熱心な会員である鈴木さんが去られるのはさみしい限りです。後任の四方さんが入れ替わりにて18日に夜間例会の時に入会していただけるそうです。送別会等で鈴木さんとはお話しできるでしょうが、この後、ご本人よりお話をいただきたいと思ひます。以上、本日の会長挨拶でした。

❖ 幹事報告



櫻井 康二 幹事

1)本日、理事会が開催されました。
2)鈴木竜哉会員が転勤されるため、退会します。後任の四方 智之（シカタ トモユキ）さんが理事会承認頂きました。新会員決定の件を郵送しますので、異議のある方は、1週間以内にお申し出ください。

❖ 出席報告

鈴木 竜哉 委員

出席報告	会員数	出席	M.U	出席率
10月4日	39(37)	31	0	83.78%
9月27日	39(37)	28	1	78.38%
9月13日	39(36)	26	0	72.22%

【欠席者】6名
富田 浩一郎、石崎 孝、長田 英一、志澤 昌彦、大高 英之、大野 英明
【今回MU】なし
【前回MU】増加なし
【前々回MU】増加なし

❖ 委員会報告

ゴルフ同好会・鈴木 竜哉 会員

10/23（日）9：30スタート、函南ゴルフクラブで開催します。奮ってご参加ください。

❖ 卓話

「がんと闘い 夢を届ける」



湘南ベルマーレフットサルクラブ
久光 重貴 様

今日はこの時間で僕のことを少しでも知っていただき、少しでも記憶に残るお話ができればいいなと思っています。僕は肺がんの治療を行っている一人のフットサル選手です。自分の癌は31歳で右の鎖骨部分の肺に見つかりました。2013年5月、湘南ベルマーレの選手に義務付けられているメディカルチェックの時です。3年経った今も現役選手として続けています。手術ができない、放射線治療ができない、そんな自分でもこうやってこの場に立っています。癌は怖い病気ではありません。病気と向き合って自分の気持ち折れてしまえば吞まれてしまうかもしれませんが、僕は向き合うことができました。自分の経験も含めてお話ししたいと思ひます。僕は肺がんのステージ3Bという診断を受けました。すぐに死ぬのではないかと、すごく辛い治療があるのではないかと…。

でも主治医の先生に発した最初の言葉は「いつからフットサルできますか？」でした。先生は冷静に「フットサルがやりたいのは分かる。でも生きなければフットサルはできないよ。まずは生きるための選択をし、生きるための治療を考えよう」と仰いました。31歳の自分は生死を考えることなどなく、生きて好きなことをやるのは当たり前でした。逆に考えると、好きなことばかり追いかけて嫌なことに背を向けていたのかもしれない。でも告知を受けて、生きている時間がどれだけ大事かを感じました。告知から治療に入るまでの2か月間は一番辛い時期で、癌の知識も経験もなく、何をすればいいのかわからない不安の中での2か月でした。でもその期間があったから頑張れる力をもらって今ここに立っているのだと思ひます。治療を始める際にクラブのHPから『久光は肺がんの治療のため登録しません』とのリリースが出て、その時に多くのメディアやサポーター、ファンの方が気にかけて支えてくださいました。フットサル選手として肺がん治療に入るというニュースを全国に届けてもらい、そのおかげで沢山のメッセージや手紙が届きました。それを大事に何度も読み返して「このまま下を向いてはいけない。期待に応えないといけない」と思えるようになりました。自分は弱い人間で嫌なことに背を向けて逃げてきたのに、多くの人に支えられていると実感しました。辛かった2か月間は「何故自分が？自分だけが？」と自分のことばかり考えていましたが、沢山のの人に支えられ、沢山の人が応援してくれている。それを自分の力に変えて頑張ろう、と思えるようになったのです。正直、治療しながら選手を続けるのは簡単ではありません。無理はできない、でもやりたいから精一杯やる。僕はあと何試合ピッチに立てるか、あと何回練習できるかわかりませぬ。いつもこれが最後になるかもしれないと考えながら取り組んで辛くても頑張れるようになりました。一瞬一瞬が大切なのです。この場で皆さんのお時間をいただいております。何か一つでも皆様の心に残れば、僕がここに立った意味もあるし責任も果たせたかもしれません。選手の義務であるメディカルチェックで癌が見つかったことを考えると、選手であったことが有り難いです。31歳で自分の健康を過信していたし、普通の社会人だったら苦しい症状が出るまで見つからなかったかもしれません。選手だったからステージ3Bで発見できて飲み薬の効果があって進行は止まっています。ですからフットサルというスポーツにも感謝しています。地域で支えられているベルマーレフットサルクラブが無ければ、僕の選手としての価値はありません。僕はこのクラブに生かされている。そしてクラブは地域に支えられている。つまり僕は地域の皆さんのおかげで生きているのです。この病気になって初めて知ったことが沢山あり、今お話ししているこの時間も癌がくれたものです。癌になったからといって不幸ではない、ということをおぼえは伝える責任があります。



自分がフットサル選手で、この病気と向き合うことができ、皆に支えられて、そのおかげで前に一歩踏み出せた、皆さんのおかげです。この地域のため、皆さんのために何かできることはないか、この時間に皆さんへ何か一つでも心に残る言葉を渡せるか。スポーツ選手として癌治療しながら続けている前例はありません。不安だし嫌なこともあります、自分にしか感じられないことを伝える責任があります。今現在も中学や高校で癌教育やいのちの授業をやらせていただひています。僕はこの病気も含め、全てのことに感謝しながら生活していかなければいけない。支えが力になり選手を継続してこられたし、これからも継続していきたい。皆さん、是非湘南ベルマーレフットサルクラブの試合を見にきてください。小田原アリーナへ足を運んでください。この地域をフットサルで明るくしたい、貢献したいと頑張っています。日本代表の選手も出てきています。このチームに地元出身の選手が多くなり、地域に愛され大切にしてもらひ応援してもらひたいのが夢です。結果、選手たちが頑張って皆さんを喜ばせることができたなら嬉しいし、スポーツの力を信じたいと思ひます。我々はフットサルリボンという活動をしてひいます。自分への支えを個人で止めずに繋げたいと考えました。当時神戸でも喉の癌になった選手がいて、彼と相談して小児がん患者支援をやらうと決めました。しかし小児がんは患者本人が癌と知らされていないケースが多く、小児がん限定の支援は難しいとわかりました。今フットサルリボン活動で一番大事にしているのは病棟の慰問活動で、フットサル選手が病院に行ってボールを使っ一緒に楽しい時間を過ごします。小児病棟に入ると子供たちはベッドの上で生活するようになり、その時間が長くなると筋力もコミュニケーション能力も落ちていきます。それは治療が終わった時に問題となります。そこで慰問活動に重点を置くようになりました。子供たちに一番感じて欲しいのは、まずやってみてチャレンジしてみたいということ。最初からあきらめてしまう子が多い、退院して普通の学校生活で集団に溶け込めない、という現状を聞いて病院内から何かを変えなければいけないと思ひました。ボールを通じてコミュニケーションを取ること、協力すること、何より病院にひることを当たり前にならないように楽しめる状況を自分たちで作ってひくことを教えてひいます。院内学級、会議室の狭いスペースでもボール遊びは楽しめます。子供たちは真剣に楽しんで笑顔になってくれます。それを見た親御さんも笑顔になります。親御さんが笑顔になると医療スタッフも笑顔になり、それを見た僕も笑顔になります。笑顔の連鎖を大事にしたいのです。自分から何かをして発信してひく、早く外へ出たい気持ちになって欲しい、退院したらフットサルを見にきて欲しい、退院したらやりたいことを持って欲しいのです。寄付していただいたお礼のぬいぐるみは、病棟へ慰問した時に子供たちに渡しているものと同じで、全て違う顔をした手作りです。これを持っている人は支えてくれる人だと子供たちも理解してひます。これからもそんな活動を続けて、笑顔の連鎖の輪を大きくしてひきたいと願っています。ここで出会った皆さん、これからも共に前進しましう！

